

# 雪の女王

SNEDRONNINGEN

七つのお話でできているおとぎ物語

青空文庫



## 第一のお話

### 鏡とそのかけらのこと

さあ、きいていらつしやい。はじめますよ。このお話をおしまいまできくと、だんだん  
 なにかがはつきりしてきて、つまり、それがわるい魔法使まほうつかいのお話であったことがわかる  
 のです。この魔法使というのは、なかまでもいちばんいけないやつで、それこそまがいな  
 しの「悪魔あくま」でした。

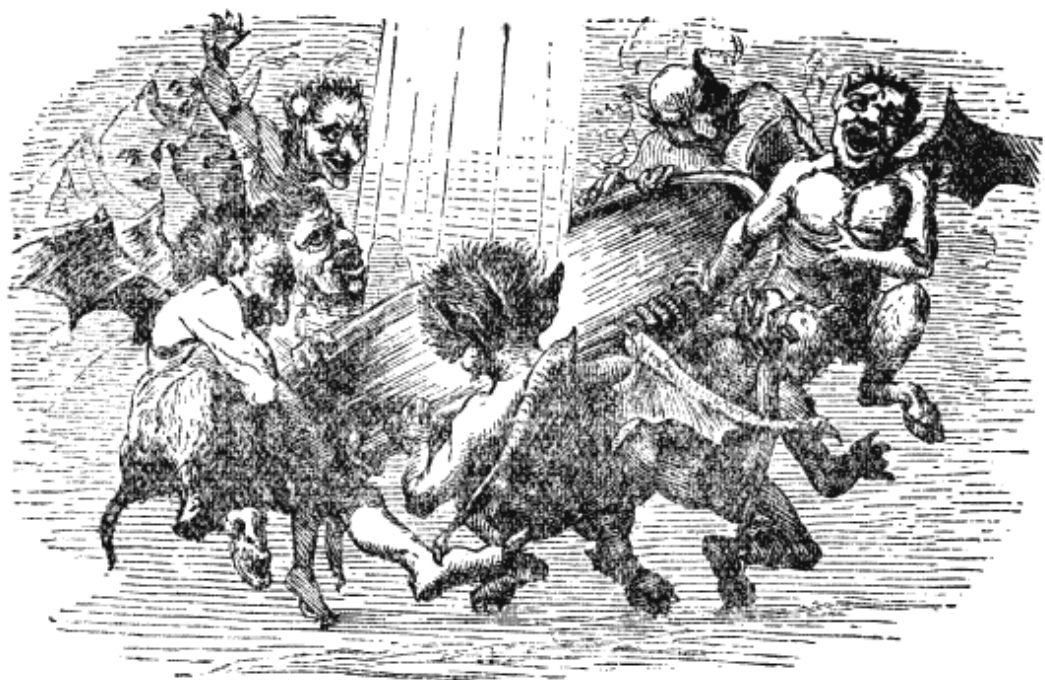
さて、ある日のこと、この悪魔は、たいそうなごきげんでした。というわけは、それは、  
 鏡をいちめん作りあげたからでしたが、その鏡というのが、どんなけっこうなうつくしい  
 もんでも、それにうつると、ほとんどないもどろげんに、ちぢこまってしまいかわり、く  
 だらない、みつともないようすのものにかぎって、よけいはつきりと、いかにもにくにく  
 しくうつるといふ、ふしぎなせいしつをもったものでした。どんなうつくしいけしきも、  
 この鏡にうつすと、煮にくたらしたほうれんそうのように見え、どんなにりっぱなひとたち

も、いやなかつこうになるか、どうたいのない、あたまだけで、さかだちするかしました。顔は見ちがえるほどゆがんでしまい、たった、ひとつぼつちのそばかすでも、鼻や口いっぱい大きくひろがって、うつりました。

「こりやおもしろいな。」と、その悪魔はいいました。ここに、たれかが、やさしい、つましい心をおこしますと、それが鏡には、しかめつらにうつるので、この魔法使の悪魔は、じぶんながら、こいつはうまい発明はつめいだわいと、ついわらいださずには、いられませんでした。

この悪魔は、魔法学校をひらいていましたが、そこにかよっている魔生徒どもは、こんどふしぎなものがあらわれたと、ほうぼうふれまわりました。

さて、この鏡ができたので、はじめて世界や人間のほんとうのすがたがわかるのだと、このれんじゆうはふいちようしてあるきました。で、ほうぼうへその鏡をもちまわったものですから、とうとうおしまいには、どこの国でも、どの人でも、その鏡にめいめいの、ゆがんだすがたをみないものは、なくなつてしまいました。こうなると、図にのつた悪魔のでもは、天までも昇のぼって行って、天使てんしたちや神さままで、わらいぐさにしようとおもいました。ところで、高く高くのぼって行けば、行くほど、その鏡はよけいひどく、し



かめつつらをするので、さすがの悪魔も、おかしくて、もっていられなくなりました。でもかまわず、高く高くとのぼって行って、もう神さまや天使のお住居すまいに近くなりました。すると、鏡はあいかわらず、しかめつつらしながら、はげしくぶるぶるえだしたものですから、ついに悪魔どもの手から、地の上へおちて、何千万、何億万、というのではたりにない、たいへんな数に、こまかくくだけで、とんでしまいました。ところが、これがため、よけい下界げかいのわざわいになったというわけは、鏡のかけらは、せいぜい砂つぶくらいの大さしかないのが、世界じゅうにとびちってしまったからで、これが人の目にはいると、そのままそこにこびりついてしまいました。すると、その人たちは、なんでも物をまぢがつてみたり、ものごとのわるいほうだけを見るようになりました。それは、そのかけらが、どんなちいさなものでも、鏡がもっていたふしぎな力を、そのまま、まだのこしてもっていたからです。なかにはまた、人のしんぞうにはいったものがあって、そのしんぞうを、氷のかけらのように、つめたいものにしてしまいました。そのうちいくまいか大きなかけらもあって、窓ガラスに使われるほどでしたが、そんな窓ガラスのうちから、お友だちをのぞいてみようとしても、まるでだめでした。ほかのかけらで、めがねに用いられたものもありましたが、このめがねをかけて、物を正しく、まちがいのないように見よう

とすると、とんださわぎがおこりました。悪魔はこんなことを、たいへんおもしろがって、おなかをゆすぶって、くすぐったがって、わらいました。ところで、ほかにもまだ、こまかいかけらは、空のなかにただよっていました。さあ、これからがお話なのですよ。

## 第二のお話

## 男の子と女の子

たくさんの家がたてこんで、おおぜい人がすんでいる大きな町では、たれでも、庭にす  
るだけの、あき地をもつわけにはいきませんでした。ですから、たいてい、植木うえきばちの花  
をみて、まんぞくしなればなりませんでした。

そういう町に、ふたりのまずしいこどもがすんでいて、植木うえきばちよりもいくらか大きな  
花ぞのをもっていました。そのふたりのこどもは、にいさんでも妹でもありませんでした  
が、まるでほんとうのきょうだいのように、仲よくしていました。そのこどもたちの両親  
は、おむこうどうしで、その住んでいる屋根うらべやは、二軒の家の屋根と屋根とがくっ  
ついた所に、むかいあっていました。そのしきりの所には、一本の雨どいがおつていて、  
両方から、ひとつずつ、ちいさな窓が、のぞいていました。で、といをひとまたぎしさえ  
すれば、こちらの窓からむこうの窓へいけました。





こどもの親たちは、それぞれ木の箱を窓の外にだして、台所でつかう野菜をうえておきました。そのほかにちよつとしたばらをひと株うえておいたのが、みごとにそだって、いきおいよくのびていました。ところで親たちのおもいつきで、その箱を、といをまたいで、横にならべておいたので、箱は窓と窓とのあいだで、むこうからこちらへと、つづいて、そっくり、生きのいい花のかべを、ふたつならべたように見えました。えんどう豆のつるは、箱から下のほうにたれさがり、ばらの木は、いきおいよく長い枝をのばして、それがまた、両方の窓にからみついて、おたがいにおじぎをしあっていました。まあ花と青葉でこしらえた、アーチのようなものでした。その箱は、高い所に取りましたし、こどもたちは、その上にはいあがつてはいけないうをいして置きました。そこで、窓から屋根へ出て、ばらの花の下にある、ちいさなこしかけに、こしをかけるおゆるしをいただいて、そこでおもしろそうに、あそびました。

冬になると、そういうあそびもだめになりました。窓はどうかすると、まるつきりこおりついてしまいました。そんなとき、こどもたちは、だんろの上で銅貨どうかをあたたためて、こおった窓ガラスに、この銅貨をおしつけました。すると、そこにまるい、まんまるい、きれいなのできあなができあがつて、このあなのむこうに、両方の窓からひとつずつ、それ

はそれはうれしそうな、やさしい目がぴかぴか光ります、それがあの男の子と、女の子でした。男の子はカイ、女の子はゲルダといいました。夏のあいだは、ただひとまたぎで、いつたりきたりしたものが、冬になると、ふたりのこどもは、いくつも、いくつも、はしごだんを、おりたりあがつたりしななければ、なりませんでした。外には、雪がくるくる舞まっていました。

「あれはね、白いみつばちがあつまつて、とんでいるのだよ。」と、おばあさんがいいました。

「あのなかにも、女王ばちがいるの。」と、男の子はたずねました。この子は、ほんとうのみつばちに、そういうものいることを、しっていたのです。

「ああ、いるともさ。」と、おばあさんはいいました。「その女王ばちは、いつもたくさんなかまのあつまつているところに、とんでいるのだよ。なかまのなかでも、いちばんからだが大きくて、けつして下にじつとしてはいない。すぐと黒い雲のなかへとんではいつてしまう。ま夜中に、いく晩も、いく晩も、女王は町の通から通へとびまわって、窓のところをのぞくのさ。するとふしぎとそこでこおってしまって、窓は花をふきつけたように、見えるのだよ。」

「ああ、それ、みたことがありますよ。」と、こどもたちは、口をそろえて叫びました。そして、すると、これはほんとうの話なのだ、とおもいました。

「雪の女王さまは、うちのなかへもはいつてこられるかしら。」と、女の子がたずねました。

「くるといいな。そうすれば、ぼく、それをあたたかいストーブの上にのせてやるよ。すると女王はとろけてしまうだろう。」と、男の子がいました。

でも、おばあさんは、男の子のかみの毛をなでながら、ほかのお話をしてくれました。

その夕方、カイはうちにおいて、着物を半分ぬぎかけながら、ふとおもいついて、窓の

そばの、いすの上にあがって、れいのちいさなのぞきあなから、外をながめました。おも

てには、ちらちら、こな雪が舞っていましたまが、そのなかで大きなかたまりがひとひら、

植木箱のはしにおちました。するとみるみるそれは大きくなって、とうとうそれが、まが

いのない、わかい、ひとりの女の人になりました。もう何百万という数の、星のように光

るこな雪で織おった、うすい白い紗しやの着物きものを着ていました。やさしい女の姿はしていました

が、氷のからだをしていました。きらきらひかる氷のからだをして、そのくせ生きている

のです。その目は、あかるい星をふたつならべたようでしたが、おちつきも休みもない目

でした。女は、カイのいる窓のほうに、うなずきながら、手まねぎしました。カイはびつくりして、いすからとびおりてしまいました。すぐそのあとで、大きな鳥が、窓の外をとんだような、けはいがしました。

そのあくる日は、からりとした、霜日しもびよりでした。——それからは、日にまし、雪どけのようきになって、とうとう春が、やってきました。お日さまはあたたかに、照りてかがやいて、緑みどりかもえだし、つばめは巣をつくりはじめました。あのむかいあわせの屋根うらべやの窓も、また、あけひろげられて、カイとゲルダとは、アパートのてっぺんの屋根上の雨あまどいの、ちいさな花ぞので、ことしもあそびました。

この夏は、じつにみごとに、ばらの花がさきました。女の子のゲルダは、ばらのこととうたわれている、さんび歌をっていました。そして、ばらの花というと、ゲルダはすぐ、じぶんの花ぞののばらのことをかんがえました。ゲルダは、そのさんび歌を、カイにうたつてきかせますと、カイもいっしょにうたいました。

「ばらのはな さきてはちりぬ

おさなごエス やがてあおがん」

ふたりのこどもは、手をとりあつて、ばらの花にほおずりして、神さまの、みひかりのかがやく、お日さまをながめて、おさなごエスが、そこに、おいでになるかのように、うたいかけました。なんとという、楽しい夏の日だったでしょう。いきいきと、いつまでもさくことをやめないようにみえる、ばらの花のにおいと、葉のみどりにつつまれた、この屋根の上は、なんていいところでしたらう。

カイとゲルダは、ならんで掛けて、けものや鳥のかいてある、絵本をみていました。ちようどそのとき——お寺の、大きな塔とうの上で、とけいが、五つうちましたが——カイは、ふと、

「あッ、なにかちくりとむねにささったよ。それから、目にもなにかとびこんだようだと、いいました。」

あわてて、カイのくびを、ゲルダがかかえると、男の子は目をぱちぱちやりました。でも、目のなかにはなにもみえませんでした。

「じゃあ、とれてしまったのだらう。」と、カイはいいましたが、それは、とれたものではありませんでした。カイの目にはいったのは、れいの鏡から、とびちったかけらでした。

そら、おぼえているでしょう。あのいやな、魔法まほうの鏡のかけらで、その鏡にうつすと、大きくていいものも、ちいさく、いやなものに、みえるかわり、いけないわるいものほど、いつそうきわだつてわるく見え、なんによらず、物事ものごとのあらが、すぐめだつて見えるのです。かわいそうに、カイは、しんぞうに、かけらがひとつはいつてしまいましたから、まもなく、それは氷のかたまりのように、なるでしょう。それなり、もういたみはしませんけれども、たしかに、しんぞうの中にのこりました。

「なんだつてべそをかくんだ。」と、カイはいいました。「そんなみつともない顔をして、ぼくは、もうどうもなつてやしないんだよ。」

「チエツ、なんだい。」こんなふうに、カイはふいに、いいだしました。「あのばらは虫がくつているよ。このばらも、ずいぶんへんてこなばらだ。みんなきたならしいばらだな。植わっている箱も箱なら、花も花だ。」

こういつて、カイは、足で植木の箱をけとばして、ばらの花をひきちぎってしまいました。

「カイちゃん、あんた、なにをするの。」と、ゲルダはさげびました。

カイは、ゲルダのおどろいた顔を見ると、またほかのばらの花を、もぎりだしました。

それから、じぶんのうちの窓の中にとびこんで、やさしいゲルダとも、はなれてしまいました。

ゲルダがそのあとで、絵本えほんをもつてあそびにきたとき、カイは、そんなもの、かあさんにだっこされている、あかんぼのみるものだ、といいました。また、おばあさまがお話をしても、カイはのべつに「だって、だって。」とばかりいつていました。それどころか、すきを見て、おばあさまのうしろにまわつて、目がねをかけて、おばあさまの口まねまでしてみせました。しかも、なかなかじょうずにやったので、みんなはおかしがつてわらいました。まもなくカイは、町じゅうの人たちの、身ぶりや口まねでも、できるようになりました。なんでも、ひとくせかわつたことや、みつともないことなら、カイはまねすることをおぼえました。

「あの子はきつと、いいあたまなのにちがいない。」と、みんないいましたが、それは、カイの目のなかにはいった鏡のかけらや、しんぞうの奥ふかくささった、鏡のかけらのさせることでした。そんなわけで、カイはまごころをささげて、じぶんをしたつてくれるゲルダまでも、いじめだしました。

カイのあそびも、すっかりかわつて、ひどくこましゃくれたものになりました。——あ



る冬の日、こな雪がさかんに舞いくるっているなかで、カイは大きな虫目がねをもって、そとにでました。そして青いうわぎのすそをひろげて、そのうえにふってくる雪をうけました。

「さあ、この目がねのところからのぞいてごらん、ゲルダちゃん。」と、カイはいいました。なるほど、雪のひとひらが、ずっと大きく見えて、みごとにひらいた花か、六角の星のようで、それはまったくうつくしいものでありました。

「ほら、ずいぶんたくみにできているだろう。ほんとうの花なんか見るよりも、ずっとおもしろいよ。かけたところなんか、ひとつだつてないものね。きちんと形をくずさずにいるのだよ。ただとけさえしなければね。」と、カイはいいました。

そののちまもなく、カイはあつい手ぶくろをはめて、そりをかついで、やってきました。そしてゲルダにむかつて、

「ぼく、ほかのこどもたちのあそんでいる、ひろばのほうへいってもいいと、いわれたのだよ。」と、ささやくと、そのままいってしまいました。

その大きなひろばでは、こどもたちのなかでも、あつかましいのが、そりを、おひやくしようたちの馬車の、うしろにいわえつけて、じょうずに馬車といっしょにすべっています。

した。これは、なかなかおもしろいことでした。こんなことで、こどもたちたれも、むちゅうになってあそんでいると、そこへ、いちだい、大きなそりがやってきました。それは、まつ白にぬってあって、なかにたれだか、そまつな白い毛皮けがわにくるまって、白いそまつなぼうしをかぶった人がのつていました。そのそりは二回ばかり、ひろばをぐるぐるまわりました。そこでカイは、さっそくそれに、じぶんのちいさなそりを、しばらくつけて、いっしよにすべっていききました。その大そりは、だんだんはやくすべって、やがて、つぎの大通を、まつすぐに、はしっていききました。そりをはしらせていた人は、くるとふりかえって、まるでよくカイをしっているように、なれなれしいようすで、うなずきましたので、カイはついそりをとくのをやめてしまいました。こんなぐあいにして、とうとうそりは町の門のそとに、でてしまいました。そのとき、雪が、ひどくふってきたので、カイはじぶんの手のさきもみることができませんでした。それでもかまわず、そりははしっていききました。カイはあせって、しきりとつなをうごかして、その大そりからはなれようとしましたが、小そりはしつかりと大そりにしばらくつけられていて、どうにもなりませんでした。ただもう、大そりにひっぱられて、風のようにとんでいきました。カイは大声をあげて、すくいをもとめました。たれの耳にも、きこえませんでした。雪はぶつつけるようにふ

りしきりました。そりは前へ前へと、とんでいきました。ときどき、そりがとびあがるのは、生いけがきや、おほりの上を、とびこすのでしようか、カイはまったくふるえあがってしまいました。主のおいのりをしようと思つても、あたまにうかんでくるのは、かけぎんの九九ばかりでした。

こな雪のかたまりは、だんだん大きくなって、しまいには、大きな白いにわたりのようになりました。ふとその雪のにわたりが、両がわにとびたちました。とたんに、大そりはとまりました。そりをはしらせていた人が、たちあがったのを見ると、毛皮のがいとうもぼうしも、すっかり雪でできていました。それはすらりと、背の高い、目のくらむようにまっ白な女の人でした。それが雪の女王だったのです。

「ずいぶんよくはしつたわね。」と、雪の女王はいいました。「あら、あんた、ふるえているのね。わたしのくまの毛皮におはいり。」

こういいながら女王は、カイをじぶんのそりにいれて、かたわらにすわらせ、カイのからだに、その毛皮をかけてやりました。するとカイは、まるで雪のふきつもったなかに、うずめられたように感じました。

「まださむいの。」と、女王はたずねました。それからカイのひたいに、ほおをつけまし

た。まあ、それは、氷よりもつとつめたい感じでした。そして、もう半分氷のかたまりになりかけていた、カイのしんぞうに、じいんとしみわたりました。カイはこのまま死んでしまうのではないかと、おもいました。——けれど、それもほんのわずかのあいだで、やがてカイは、すっかり、きもちがよくなって、もう身のまわりのさむさなど、いつこう気にならなくなりました。

「ぼくのそりは——ぼくのそりを、わすれちゃいけない。」

カイがまず第一におもいだしたのは、じぶんのそりのことでありました。そのそりは、白いにわたりのうちの一わに、しっかりとむすびつけられました。このにわとりは、そりをせなかにのせて、カイのうしろでとんでいました。雪の女王は、またもういちど、カイにほおずりました。それで、カイは、もう、かわいらしいゲルダのことも、おばあさまのことも、うちのこと、なにもかも、すっかりわすれてしまいました。

「さあ、もうほおずりはやめましようね。」と、雪の女王はいいました。「このうえすると、お前を死なせてしまうかもしれないからね。」

カイは女王をみあげました。まあそのうつくしいことといったら。カイは、これだけかしくそうなりっぱな顔がほかにあろうとは、どうしたっておもえませんでした。いつか窓

のところに来て、手まねきしてみせたときとちがって、もうこの女王が、氷でできているとは、おもえなくなりました。カイの目には、女王は、申しぶんなくかんぜんで、おそろしいなどは、感じなくなりました。それでうちとけて、じぶんは分ぶん数すうまでも、あんざんで、できることや、じぶんの国が、いく平方マイルあって、どのくらいの人口があるか、しっていることまで、話しました。女王は、しじゅう、にこにこして、それをきいています。それが、なんだ、しっていることは、それっぱかしかと、いわれたようにおもって、あらためて、ひろいひろい大空をおぎました。すると、女王はカイをつれて、たかくとびました。高い黒雲の上までも、とんで行きました。あらしはぎあぎあ、ひゆうひゆう、ふきすすんで、昔の歌でもうたっているようでした。女王とカイは、森や、湖や、海や、陸の上を、とんで行きました。下のほうでは、つめたい風がごうごううなって、おおかみのむれがほえたり、雪がしやしやつときしつたりして、その上に、まっくろなからすがカアカアないでとんでいました。しかし、はるか上のほうには、お月さまが、大きくこうこうと、照っていました。このお月さまを、ながいながい冬の夜じゅう、カイはながめてあかしました。ひるになると、カイは女王の足もとでねむりました。

## 第三のお話

## 魔法の使える女の花ぞの

ところで、カイが、あれなりかえってこなかったとき、あの女の子のゲルダは、どうしたでしょう。カイはまあどうしたのか、たれもしりませんでした。なんの手がかりもえられませんでした。こどもたちの話でわかったのは、カイがよその大きなそりに、じぶんのそりをむすびつけて、町をはしりまわって、町の門からそとへでていったということだけでした。さて、それからカイがどんなことになってしまったか、たれも知っているものはありませんでした。いくにんもの人のなみだが、この子のために、そそがれました。そして、あのゲルダは、そのうちでも、ひとり、もうながいあいだ、むねのやぶれるほどになりました。——みんなのうわさでは、カイは町のすぐそばを流れている川におちて、おぼれてしまったのだらうということでした。ああ、まったくながいながい、いんきな冬でした。



いま、春はまた、あたたかいお日さまの光とつれだつてやってきました。

「カイちゃんは死んでしまったのよ。」と、ゲルダはいました。

「わたしはそうおもわないね。」と、お日さまがいました。

「カイちゃんは死んでしまったのよ。」と、ゲルダはつばめにいました。

「わたしはそうおもいません。」と、つばめたちはこたえました。そこで、おしまいに、ゲルダは、じぶんでも、カイは死んだのではないと、おもうようになりました。

「あたし、あたらしい赤いくつをおろすわ。あれはカイちゃんのまだみなかったくつよ。あれをはいて川へおりにいって、カイちゃんのことをきいてみましょう。」と、ゲルダはある朝いいました。で、朝はやかったので、ゲルダはまだねむっていたおばあさまに、せつぷんして、赤いくつをはき、たつたひとりぼっちで、町の門を出て、川のほうへあるいていきました。

「川さん、あなたが、わたしのすきなおともだちを、とって行ってしまったというのは、ほんとうなの。この赤いくつをあげるわ。そのかわり、カイちゃんをかえしてね。」

すると川の水が、よしよしというように、みように波だつてみえたので、ゲルダはじぶんのもっているもののなかでいちばんすきだった、赤いくつをぬいで、ふたつとも、川の



なかになげこみました。ところが、くつは岸の近くにおちたので、さぎ波がすぐ、ゲルダの立っているところへ、くつをはこんできてしまいました。まるで川は、ゲルダから、いちばんだいじなものをもらうことをのぞんでいないように見えました。なぜなら、川はカインをかくしてはいなかったからです。けれど、ゲルダは、くつをもっととおくのほうへなげないからいけなかったのだとおもいました。そこで、あしのしげみにうかんでいた小舟にのりました。そして舟のいちばんはしへいつて、そこからくつをなげこみました。でも、小舟はしっかりと岸にもやつてなかったので、くつをなげるので動かしただひょうしに、岸からすべり出してしまいました。それに気がついて、ゲルダは、いそいでひつかえそうとしましたが、小舟のこちらのはしまでこないうちに、舟は二三尺にさんじやくも岸からはなれて、そのまま、どんだんはやく流れていきました。

そこで、ゲルダは、たいそうびつくりして、なきだしましたが、すずめのほかは、たれもその声をきくものはありませんでした。すずめには、ゲルダをつれかえる力はありませんでした。でも、すずめたちは、岸にそつてとびながら、ゲルダをなぐさめるように、「だいじょうぶ、ぼくたちがいます。」と、なきました。

小舟は、ずんずん流れにはこぼれていきました。ゲルダは、足にくつしたをはいただけ

で、じつと舟のなかにすわったままでいました。ちいさな赤いくつは、うしろのほうで、ふわふわういていましたが、小舟においつくことはできませんでした。小舟のほうが、くつよりも、もつとはやくながれていったからです。

岸は、うつくしいけしきでした。きれいな花がさいていたり、古い木が立っていたり、ところどころ、なだらかな土手<sup>どて</sup>には、ひつじやめうしが、あそんでいました。でも、にんげんの姿は見えませんでした。

「ことによると、この川は、わたしを、カイちゃんのところへ、つれていってくれるのかもしれないわ。」と、ゲルダはかんがえました。

それで、だんだんげんきがでてきたので、立ちあがって、ながいあいだ、両方の青あおとうつくしい岸をながめていました。それからゲルダは、大きなさくらんぼばたけのところにきました。そのはたけの中には、ふうがわりな、青や赤の窓のついた、一けんのうちいさな家がたっていました。その家はかやぶきで、おもてには、舟で通りすぎる人たちのほうにむいて、木<sup>もくせい</sup>製のふたりのへいたいが、銃<sup>じゅうけん</sup>剣<sup>けん</sup>肩<sup>けん</sup>に立っていました。

ゲルダは、それをほんとうのへいたいかとおもって、こえをかけました。しかし、いうまでもなくそのへいたいは、なんのこたえもしませんでした。ゲルダはすぐそのそばまで

きました。波が小舟を岸のほうにはこんだからです。

ゲルダはもつと大きなこえで、よびかけてみました。すると、その家のなかから、撞しゅも木杖くづえにすがった、たいそう年とつたおばあさんが出てきました。おばあさんは、目のさめるようにきれいな花をかいた、大きな夏ぼうしをかぶっていました。

「やれやれ、かわいそうに。どうしておまえさんは、そんなに大きな波のたつ上を、こんなとおいところまで流れてきたのだね。」と、おばあさんはいいました。

それからおばあさんは、ざぶりざぶり水の中にはいつて、撞木杖で小舟をおさえて、それを陸おかのほうへひっぱつてきて、ゲルダをだきおろしました。ゲルダはまた陸にあがることのできたのをうれいとおもいました。でも、このみなれないおばあさんは、すこし、こわいようでした。

「さあ、おまえさん、名まえをなんというのだから、またどうして、ここへやってきたのだから、話してごらん。」と、おばあさんはいいました。そこでゲルダは、なにもかも、おばあさんに話しました。おばあさんはうなずきながら、「ふん、ふん。」と、いいました。ゲルダは、すっかり話してしまつてから、おばあさんがカイをみかけなかったかどうか、たずねますと、おばあさんは、カイはまだここを通らないが、いずれそのうち、ここを通

るかもしれない。まあ、そう、くよくよおもわなくて、花をながめたり、さくらんぼをたべたりしておいで。花はどんな絵本のよりも、ずっときれいだし、その花びらの一まい、一まいが、ながいお話をしてくれるだろうからといいました。それからおばあさんは、ゲルダの手をとって、じぶんのちいさな家へつれて行って、中から戸にかぎをかけました。

その家の窓は、たいそう高くて、赤いや、青いや、黄いろの窓ガラスだったので、お日さまの光はおもしろい色にかわって、きれいに、へやのなかにさしこみました。つくえの上には、とてもおいしいさくらんぼが置いてありました。そしてゲルダは、いくらたべてもいいという、おゆるしがたものですから、おもうぞんぶんそれをたべました。ゲルダがさくらんぼをたべているあいだに、おばあさんが、金のくしで、ゲルダのかみの毛をすきました。そこで、ゲルダのかみの毛は、ばらの花のような、まるっこくて、かわいらしい顔のまわりで、金色にちりちりまいて、光っていました。

「わたしは長いあいだ、おまえのような、かわいらしい女の子がほしいとおもっていたのだよ。さあこれから、わたしたちといっしょに、なかよくくらそうね。」と、おばあさんはいいました。そしておばあさんが、ゲルダのかみの毛にくしをいれてやっていいうちに、ゲルダはだんだん、なかよしのカイのことなどはわすれてしまいました。というのは、こ

のおばあさんは魔法まほうが使えるからでした。けれども、おばあさんは、わるい魔女まじよではありませんでした。おばあさんはじぶんのたのしみに、ほんのすこし魔法を使うだけで、こんども、それをつかったのは、ゲルダをじぶんの手もとにおきたいためでした。そこで、おばあさんは、庭へ出て、そのぼらの木にむかって、かたっぱしから撞木杖をあてました。すると、いままでうつくしく、さきほこっていたぼらの木も、みんな、黒い土の中にしずんでしまったので、もうたれの目にも、どこにいままでぼらの木があつたか、わからなくなりしました。おばあさんは、ゲルダがぼらを見て、自分の家のぼらのことをかながえ、カイのことをおもいだして、ここからにげていってしまうといけなとおもったのです。

さて、ゲルダは花ぞのにあんないされました。——そこは、まあなんとという、いい香りがあふれていて、目のさめるように、きれいなところでしたらう。花という花は、こぼれるようにさいていました。そこでは、一ねんじゅう花がさいていました。どんな絵本の花だつて、これよりうつくしく、これよりにぎやかな色にさいてはいませんでした。ゲルダはおどりあがつてよろこびました。そして夕日が、高いさくらの木のむこうにはいつてしまふまで、あそびました。それからゲルダは、青いすみれの花がいつぱいつまった、赤い絹のクシヨンのある、きれいなベッドの上で、結婚式の日の女王さまのような、すばらし

い夢をむすびました。

そのあくる日、ゲルダは、また、あたたかいお日さまのひかりをあびて、花たちとあそびました。こんなふうにして、いく日もいく日もたちました。ゲルダは花ぞいの花をのこらずしりました。そのくせ、花ぞいの花は、かずこそずいぶんたくさんありましたけれど、ゲルダにとっては、どうもまだなにか、ひとりたりないようにおもわれました。でも、それがなんの花であるか、わかりませんでした。するうちある日、ゲルダはなにげなくすわって、花をかいとおばあさんの夏ぼうしを、ながめていましたが、その花のうちで、いちばんうつくしいのは、ばらの花でした。おばあさんは、ほかのばらの花をみんな見えないうちに、かくしたくせに、じぶんのぼうしにかいたばらの花を、けすことを、ついわすれていたのです。まあ手ぬかりということは、たれにでもあるものです。

「あら、ここのお庭には、ばらがいないわ。」と、ゲルダはさげびました。

それから、ゲルダは、花ぞいのを、いくどもいくども、さがしまわりましたけれども、ばらの花は、ひとつもみつきりませんでした。そこで、ゲルダは、花ぞいのすわってなきました。ところが、なみだが、ちょうどばらがうずめられた場所の上におちました。あたたかいなみだが、しつとりと土をしめらすと、ばらの木は、みるみるしずまない前とおなじ

ように、花をいっぱいつけて、地の上にあらわれてきました。ゲルダはそれをだいて、せつぷんしました。そして、じぶんのうちのばらをおもいだし、それといっしょに、カイのこともおもいだしました。

「まあ、あたし、どうして、こんなところにひきとめられていたのかしら。」と、ゲルダはいいました。「あたし、カイちゃんをさがさなくてはならなかったのかわ——カイちゃん、どこにいるか、しらなくって。あなたは、カイちゃんが死んだとおもって。」と、ゲルダは、ばらにききました。

「カイちゃんは死にはしませんよ。わたしどもは、いままで地のなかにいました。そこには死んだ人はみないましたが、でも、カイちゃんはみえませんでしたよ。」と、ばらの花がこたえました。

「ありがとう。」と、ゲルダはいつて、ほかの花のところへいつて、ひとつひとつ、うてなのなかをのぞきながらたずねました。「カイちゃんはどこにいるか、しらなくって。」

でも、どの花も、日なたぼっこしながら、じぶんたちのつくったお話や、おとぎばなしのことばかりかんがえていました。ゲルダはいろいろと花にきいてみましたが、どの花もカイのことについては、いっこうにしりませんでした。

ところで、おにゆりは、なんといったでしょう。

「あなたには、たいこの音が、ドンドンというのがきこえますか。あれには、ふたつの音しかないのです。だからドンドンといつでもやっているのです。女たちがうたう、とむらいのうたをおききなさい。また、坊さんぼやうのあげる、おいのりをおききなさい。——インド人じんのやめめは、火葬かそうのたきぎのつまれた上に、ながい赤いマントをまとして立っています。焔ほのおがその女と、死んだ夫おつとのしかばねのまわりにたちのぼります。でもインドの女は、ぐるりにあつまつた人たちのなかの、生きているひとりの男のことをかんがえているのです。その男の目は焔よりもあつくもえ、その男のやくような目つきは、やがて、女のからだをやきつくして灰にする焔などよりも、もつとはげしく、女の心の中で、もえていたのです。心の焔は、火あぶりのたきぎのなかで、もえつきるものでしょうか。」

「なんのことだか、まるでわからないわ。」と、ゲルダがこたえました。

「わたしの話はそれだけさ。」と、おにゆりはいいました。

ひるがおは、どんなお話をしたでしょう。

「せまい山道のむこうに、昔のさむらいのお城がぼんやりみえます。くずれかかった、赤い石がきのうえには、つたがふかくおいしげって、ろだいのほうへ、ひと葉ひと葉、はい



あがつています。ろだいの上には、うつくしいおとめが、らんかんによりかかつて、おうらいをみおろしています。どんなばらの花でも、そのおとめほど、みずみずとは枝にさきだしません。どんなりんごの花でも、こんなにかるがるとしたふうに、木から風がはこんでくることはありません。まあ、おとめのうつくしい絹の着物のさらさらなること。

あの人はまだこないのかしら。」

「あの人というのは、カイちゃんのことなの。」と、ゲルダがたずねました。

「わたしは、ただ、わたしのお話をしただけ。わたしの夢をね。」と、ひるがおはこたえました。

かわいい、まつゆきそうは、どんなお話をしたでしょう。

「木と木のあいだに、つなでつるした長い板がさがっています。ぶらんこな。雪のように白い着物を着て、ぼうしには、ながい、緑色の絹のリボンをまいた、ふたりのかわいらしい女の子が、それにのつてゆられています。この女の子たちよりも、大きい男きようだが、そのぶらんこに立つてのつています。男の子は、かた手にちいさなお皿をもつてるし、かた手には土製のパイプをにぎっているの、からだをささえるために、つなにうでをまきつけています。男の子はシャボンだまをふいているのです。ぶらんこがゆれて、シ

ヤボンだまは、いろんなくつくしい色にかわりながらとんで行きます。いちばんおしまい  
のシャボンだまは、風にゆられながら、まだパイプのところについています。ぶらんこは  
とぶようにゆれています。あら、シャボンだまのように身のかるい黒犬があと足で立つて、  
のせてもらおうとしています。ぶらんこはゆれる、黒犬はひっくりかえって、ほえている  
わ。からかわれて、おこっているのね。シャボンだまははじけます。——ゆれるぶらんこ。  
われてこわれるシャボンだま。——これがわたしの歌なんです。」

「あなたのお話は、とてもおもしろそうね。けれどあなたは、かなしそうに話しているの  
ね。それからあなたは、カイちゃんの話は、なんにも話してくれないのね。」

ヒヤシンスの花は、どんなお話をしたでしょう。

「あるところに、三人の、すきとおるようにつくしい、きれいな姉いもうとがおりまし  
た。なかでいちばん上のむすめの着物は赤く、二ばん目のは水色で、三ばん目のはまっ白  
でした。きょうだいたちは、手をとりあって、さえた月の光の中で、静かな湖みずうみのふちに  
て、おどりをおどります。三人とも妖ようじよ女ではなくて、にんげんでした。そのあたりには、  
なんとなくあまい、いいにおいがしていました。むすめたちは森のなかにきえました。あ  
まい、いいにおいが、いつそうつよくなりました。すると、その三人のうつくしいむすめ

をいれた三つのひつぎが、森のしげみから、すうつとあらわれてきて、湖のむこうへわたっていきました。つちぼたるが、そのぐるりを、空に舞まっているちいさなともしびのように、ぴかりぴかりしていました。おどりくるつていた三人のむすめたちは、ねむったのでしようか。死んだのでしようか。——花のにおいはいいました。あれはなきがらです。ゆうべの鐘かねがなくなつたひとたちをとむらいます。」

「ずいぶんかなしいお話ね。あなたの、そのつよいにおいをかぐと、あたし死んだそのむすめさんたちのことを、おもいださずにはいられませんわ。ああ、カイちゃんは、ほんとうに死んでしまったのかしら。地のなかにはいつていたばらの花は、カイちゃんは死んではいないといつてるけれど。」

「チリン、カラン。」と、ヒヤシンスのすずがなりました。「わたしはカイちゃんのために、なっているではありません。カイちゃんなんて人は、わたしたち、すこしもしりませんもの。わたしたちは、ただ自分のしつてゐるたつたひとつの歌を、うたっているだけです。」

それから、ゲルダは、緑の葉のあいだから、あかるくさいている、たんぼぼのところへいきました。

「あなたはまるで、ちいさな、あかるいお日さまね。どこにわたしのおともだちがいるか、しつていたらおしえてくださいな。」と、ゲルダはいいました。

そこで、たんぽぽは、よけいあかるくひかりながら、ゲルダのほうへむきました。どんな歌を、その花がうたつたでしょう。その歌も、カイのことではありませんでした。

「ちいさな、なか庭には、春のいちばんはじめの日、うららかなお日さまが、あたたかに照っていました。お日さまの光は、おとなりの家の、まっ白なかべの上から下へ、すべりおちていました。そのそばに、春いちばんはじめにさく、黄色い花が、かがやく光の中に、金のようにさいていました。おばあさんは、いすをそとにだして、こしをかけていました。おばあさんの孫の、かわいそうな女中ぼうこうをしているうつくしい女の子が、おばあさんにあうために、わずかなおひまをもらって、うちへかえってきました。女の子はおばあさんにせつぷんしました。このめぐみおおいせつぷんには金きんが、こころの金きんがありました。その口にも金、そのふむ土にも金、そのあさのひとときにも金がありました。これがわたしのつまらないお話です。」と、たんぽぽがいました。

「まあ、わたしのおばあさまは、どうしていらっしやるかしら。」と、ゲルダはためいきをつきました。「そうよ。きつとおばあさまは、わたしにあいたがって、かなしがって

らっしやるわ。カイちゃんのいなくなつたとおなじように、しんぱいしていらっしやるわ。けれど、わたし、じきにカイちゃんをつれて、うちにかえられるでしょう。——もう花たちにくらたずねてみたつてしかたがない。花たち、ただ、自分の歌をうたうだけで、なんにもこたえてくれないのだもの。」

そこでゲルダは、はやくかけられるように、着物をきりりとたくしあげました。けれど、黄<sup>き</sup>ずいせんを、ゲルダがとびこえようとしたとき、それに足がひつかかりました。そこでゲルダはたちどまつて、その黄色い、背の高い花にむかつてたずねました。

「あんた、カイちゃんのこと、なんかしつているの。」

そしてゲルダは、ごごんで、その花の話すことをききました。その花はなんといつたでしよう。

「わたし、じぶんがみられるのよ。じぶんがわかるのよ。」と、黄ずいせんはいいました。「ああ、ああ、なんてわたしはいいにおいがするんだろう。屋根うらのちいさなへやに、半はだかの、ちいさなおどりが立っています。おどりはかた足で立ったり、両足で立ったりして、まるで世界中をふみつけるように見えます。でも、これはほんの目のまよいです。おどりは、ちいさな布<sup>ぬの</sup>に、湯わかしから湯をそそぎます。これはコルセットです。

——そうです。そうです、せいけつがなによりです。白い上着うわぎも、くぎにかけてあります。それもまた、湯わかしの湯であらって、屋根でかわかしたもののなのです。おどりこは、その上着をつけて、サフラン色のハンケチをくびにまきました。ですから、上着はよけい白くみました。ほら、足をあげた。どう、まるでじくの上に立って、うんとふんばった姿は。わたし、じぶんが見えるの。じぶんがわかるの。」

「なにもそんな話、わたしにしなくてもいいじゃないの。そんなこと、どうだって、かまわないわ。」と、ゲルダはいいました。

それでゲルダは、庭のむこうのはしまでかけて行きました。その戸はしまっていました。ゲルダがそのさびついたとつてを、どんとおしたので、はずれて戸はばんとひらきました。ゲルダはひろい世界に、はだしのままでとびだしました。ゲルダは、三度どもあとをふりかえってみましたが、たれもおっかけてくるものはありませんでした。とうとうゲルダは、もうとてもはしる事ができなくなったので、大きな石の上にこしをおろしました。そこらを見まわしますと、夏はすぎて、秋がふかくなっていました。お日さまが年中かがやいて、四季しきの花がたえずさいていた、あのうつくしい花ぞのでは、そんなことはわかりませんでした。

「ああ、どうしましょう。あたし、こんなにおくれてしまつて。」と、ゲルダはいいました。「もうとうに秋になっているのね。さあ、ゆつくりしてはいられないわ。」

そしてゲルダは立ちあがつて、ずんずんあるきだしました。まあ、ゲルダのかよわい足は、どんなにいたむし、そして、つかれていたことでしょう。どこも冬がれて、わびしいけしきでした。ながいやなぎの葉は、すっかり黄ばんで、きりが雨しずくのように枝からたれていました。ただ、とげのある、こけもだけは、まだ実をむすんでいましたが、こけもはすつぱくて、くちがまがるようでした。ああ、なんてこのひろびろした世界は灰色で、うすぐらくみえたことでしょう。

## 第四のお話

## 王子と王女

ゲルダは、またも、やすまなければなりませんでした。ゲルダがやすんでいた場所の、ちようどむこうの雪の上で、一わの大きなからすが、ぴよんぴよんやっていました。このからすは、しばらくじつとしたなりゲルダをみつめて、あたまをふっていました。やがてこういいました。

「カア、カア、こんちは。こんちは。」

からすは、これよりよくは、なにもいうことができませんでした。でも、ゲルダをなつかしくおもっていて、このひろい世界で、たったひとりぼっち、どこへいくのだといて、たずねました。この「ひとりぼっち。」ということばを、ゲルダはよくあじわって、しみじみそのことばに、ふかいいみのこもっていることをおもいました。ゲルダはそこからすに、じぶんの身の上のことをすっかり話してきかせた上、どうかしてカイをみなか





「つたか、たずねました。」

「するとからすは、ひどくまじめにかんがえこんで、こういいました。」

「あれかもしれない。あれかもしれない。」

「え、しつてて。」と、ゲルダは大きなこえでいって、からすをらんぼうに、それこそいきのとまるほどせつぷんしました。

「おてやわらかに、おてやわらかに。」と、からすはいいました。「どうも、カイちゃんをしつていような気がします。たぶん、あれがカイちゃんだろうとおもいますよ。けれど、カイちゃんは、王女さまのところについて、あなたのことなどは、きつとわすれていきますよ。」

「カイちゃんは、王女さまのところにいるんですって。」と、ゲルダはききました。

「そうです。まあ、おききなさい。」と、からすはいいました。「どうも、わたしにするど、にんげんのことばで話すのは、たいそうなほねおりです。あなたにからすのことばがわかると、ずつとうまく話せるのだからなあ。」

「まあ、あたし、ならつたことがなかったわ。」と、ゲルダはいいました。「でも、うちのおばあさまは、おできになるのよ。あたし、ならつておけばよかった。」

「かまいませんよ。」と、からすはいいました。「まあ、できるだけしてみますから。うまくいけばいいが。」

それからからは、しつていることを、話しました。

「わたしたちがいまいる国には、たいそうかしこい王女さまがおいでなるのです。なにしろ世界中のしんぶんをのこらず読んで、のこらずまたわすれてしまいます。まあそんなわけで、たいそうりこうなかなのです。さて、このあいだ、王女さまは玉座ぎよくざにおすわりになりました。玉座というものは、せけんというほどのしいものではありません。そこで王女さまは、くちずさみに歌をうたいました。その歌は『なぜに、わたしは、むこ  
とらぬ』といった歌でした。そこで、『なるほど、それももつともだわ。』と、いうわけで、王女さまはけつこんしようとおもいました。でも夫おつとにするなら、ものをたずねても、すぐとこたえるようなのがほしいとおもいました。だって、ただそこにつつ立って、ようすぶつているだけでは、じきにたいくつしてしまいますからね。そこで、王女さまは、女官じょかんたち、のこらずおめしになって、このもくろみをお話しになりました。女官たちは、たいそうおもしろくおもいました、

『それはよいおもいつきでございます。わたくしどもも、ついさきごろ、それとおなじこ

とをかんがえついたりしないで。』などと申しました。

「わたしのいつていることは、ごく、ほんとうのことなのですよ。」と、からすはいつて、「わたしには、やさしいいなずけがあつて、その王女さまのお城に、自由にとんでいける、それがわたしにすっかり話してくれたのです。」と、いいそえました。

いうまでもなく、その、いいなずけというのはからすでした。というのは、にたものどうしで、からすはやはり、からすなかまであつまります。

ハートと、王女さまのかしらもじでふちどつたしんぶんが、さつそく、はつこうされました。それには、ようすのりつばな、わかい男は、たれでもお城にきて、王女さまと話すことができる。そしてお城へきても、じぶんのうちにいるように、気やすく、じょうずに話した人を、王女は夫としてえらぶであろうということがかいてありました。

「そうです。そうです。あなたはわたしをだいじょうぶ信じてください。この話は、わたしがここにこうしてすわっているのとどうよう、ほんとうの話なのですから。」と、からすはいいました。

「わかい男の人たちは、むれをつくつて、やってきました。そしてたいそう町はこんぎつして、たくさんの人が、あっちへいつたり、こっちへきたり、いそがしそうにかけずりま

わっていました。でもはじめの日も、つぎの日も、ひとりだつてうまくやったものはありません。みんなは、お城のそとでこそ、よくしゃべりましたが、いちどお城の門をはいって、銀づくめのへいたいをみたり、かいだんをのぼって、金ぴかのせいふくをつけたお役人に出あつて、あかるい大広間にはいると、とたんにぼうつとなつてしまいました。そして、いよいよ王女さまのおいでになる玉座の前に出たときには、たれも王女さまにいわれたことばのしりを、おうむがえしにくりかえすほかありませんでした。王女さまとすれば、なにもじぶんのいったことばを、もういちどいつてもらつてもしかたがないでしょう。ところが、だれも、ごてんのなかにはいると、かぎたばこでものまされたように、ふらふらで、おうらいへでてきて、やつとわれにかえつて、くちがきけるようになる。なにしろ町の門から、お城の門まで、わかいひとたちが、れつをつくつてならんでいました。わたしはそれをじぶんで見てきましたよ。」と、からすが、ねんをおしていいました。

「みんなは自分のぼんが、なかなかまわつてこないの、おなかがすいたり、のどがかわいたりしましたが、ごてんの中では、なまぬるい水いっぱいくれませんでした。なかで気のきいたせんせいたちが、バタパンご持参で、やつてきていましたが、それをそばの人にわけようとはしませんでした。このれんじゅうの気では——こいつら、たんとひもじそう

な顔をしているがいい。おかげで王女さまも、ごさいようになるまいから——というのでしよう。」

「でも、カイちゃんはどうしたのです。いつカイちゃんはやってきたのです。」と、ゲルダはたずねました。「カイちゃんは、その人たちのなかまにいたのですか。」

「まあまあ、おまちなさい。これから、そろそろ、カイちゃんのことになるのです。ところで、その三日目に、馬にも、馬車にももらないちいさな男の子が、たのしそうにお城のほうへ、あるいていきました。その人の目は、あなたの目のようにかがやいて、りっぱな、長いかみの毛をもっていました。着物はぼろぼろにきれていました。」

「それがカイちゃんなのね。ああ、それでは、とうとう、あたし、カイちゃんをみつけたわ。」と、ゲルダはうれしそうにさけんで、手をたたきました。

「その子は、せなかに、ちいさなはいのうをしょっていました。」と、からすがいいいました。

「いいえ、きつと、それは、そりよ。」と、ゲルダはいいました。「カイちゃんは、そりといっしょに見えなくなってしまったのですもの。」

「なるほど、そうかもしれない。」と、からすはいいました。「なにしろ、ちよつと見

ただけですから。しかし、それは、みんなわたしのやさしいいなずけからきいたのです。それから、その子はお城の門をはいって、銀の軍服ぐんぷくのへいたいをみながら、だんをのぼって、金ぴかのせいふくのお役人の前にでましたが、すこしもまごつきませんでした。それどころか、へいきでえしやくして、

『かいだんの上に立っているのは、さぞたいくつでしょうね。ではごめんこうむって、わたしは広間にはいらせてもらいましょう。』と、いいました。広間にはあかりがいつぱいについて、すうみつこもんかん枢密顧問官や、身分の高い人たちが、はだしで金の器うつわをはこんであるいていました。そんな中で、たれだつて、いやでもおごそかなきもちになるでしょう。ところへ、その子のながぐつは、やけにやかましくギユウ、ギユウなるのですが、いつこうにへいきでした。」

「きつとカイちゃんよ。」と、ゲルダがさげびました。

「だつて、あたらしい長ぐつをはいていましたもの。わたし、そのくつがギユウ、ギユウいうのを、おばあさまのへやできいたわ。」

「そう、ほんとうにギユウ、ギユウつてなりましたよ。」と、からすはまた話しはじめました。

「さて、その子は、つかつかと、糸車ほどの大きなしんじゆに、こしをかけている、王女さまのご前ぜんに進みました。王女さまのぐるりをとりまいて、女官たちがおつきを、そのおつきがまたおつきを、したがえ、侍従しじゆうがけらいの、またそのけらいをしたがえ、それがまた、めいめい小姓こしやうをひきつれて立っていました。しかも、とびらの近くに立っているものほど、いばっているように見えました。しじゆう、うわぐつであるきまわっていた、けらいのけらいの小姓なんか、とてもあおむいて顔が見られないくらいでした。とにかく、戸ぐちのところではいばりかえっているふうは、ちよつと見ものでした。」

「まあ、ずいぶんこわいこと。それでもカイちゃん、王女さまとけつこんしたのですか。」と、ゲルダはいいました。

「もし、わたしがからすでなかつたなら、いまのいいなずけをすてても、王女さまとけつこんしたかもしれません。人のうわさによりますと、その人は、わたしがからすのことばを話すときとどうよう、じょうずに話したということでした。わたしは、そのことを、わたしのいいなずけからきいたのです。どうして、なかなかようすのいい、げんきな子でした。それも王女さまとけつこんするためにはきたのではなくて、ただ、王女さまがどのくらいかしこいか知ろうとおもってやってきたのですが、それで王女さまがすきになり、王女



さまもまたその子がすきになったというわけです。」

「そう、いよいよ、そのひと、カイちゃんにちがいないわ。カイちゃんは、そりやりこうで、分数まであんざんでやれますもの——ああ、わたしを、そのお城へつれていってくださらないこと。」と、ゲルダはいいました。

「さあ、くちでいうのはたやすいが、どうしたら、それができるか、むずかしいですよ。」と、からすはいいました。「ところで、まあ、それをどうするか、まあ、わたしのいいなずけにそうだんしてみましよう。きつと、いいちえをかしてくれるかもしれせん。なにしろ、あなたのような、ちいさな娘さんが、お城の中にはいることは、ゆるされていないのですからね。」

「いいえ、そのおゆるしならもらえてよ。」と、ゲルダがこたえました。「カイちゃんは、わたしがきたときけば、すぐに出てきて、わたしをいれてくれるでしょう。」

「むこうのかきねのところ、まっぺいらっしやい。」と、からすはいつて、あたまをぶりふりとんでいつてしまいました。

そのからすがかえつてきたときには、晩もだいぶくらくなっていました。

「すてき、すてき。」と、からすはいいました。「いいなずけが、あなたによろしくとの

ことでしたよ。さあ、ここに、すこしばかりパンをもつてきてあげました。さぞ、おなか  
がすいたでしょう。いいなづけが、だいどころからもつてきたのです。そこにはたくさん  
まだあるのです。——どうも、お城へはいることは、できそうもありませんよ。なぜとい  
つて、あなたはくつをはいていませんから、銀の軍服のへいたいや、金ぴかのせいふく  
のお役人たちが、ゆるしてくれないでしょうからね、だがそれで泣いてはいけません。きつと  
つれて行けるくふうはしますよ。わたしのいいなづけは、王女さまのねまに通じている、  
ほそい、うらばしごをしつていますし、そのかぎのあるところもしつているのですからね  
」。

そこで、からすとゲルダとは、お庭をぬけて、木の葉があとからあとからと、ちつてく  
る並木道なみきみちを通りました。そして、お城のあたりが、じゅんじゅんにきえてしまったとき、  
からすはすこしあいているうらの戸口へ、ゲルダをつれていきました。

まあ、ゲルダのむねは、こわかったり、うれしかったりで、なんてどきどきしたこと  
でしょう。まるでゲルダは、なにかわるいことでもしているような気がしました。けれど、  
ゲルダはその人が、カイちゃんであるかどうかをしりたい、いっしんなのです。そうです。  
それはきつと、カイちゃんにちがいありません。ゲルダは、しみじみとカイちゃんのリこ

うそうな目つきや、長いかみの毛をおもいだしていました。そして、ふたりがうちにおいて、ぼらの花のあいだにすわってあそんだとき、カイちゃんがわらったとおりの笑顔が、目にうかびました。そこで、カイちゃんにあつて、ながいながい道中をして自分をさがしにやってきたことをきき、あれなりかえらないので、どんなにみんなが、かなしんでいるかしたたなら、こうしてきてくれたことを、どんなによろこぶでしょう。まあ、そうおもうと、うれしいし、しんぱいでした。

さて、からすとゲルダとは、かいだんの上のぼりまりました。ちいさなランプが、たなの上についていました。そして、ゆか板のまん中のところには、飼いならされた女がらす、じつとゲルダを見て立っていました。ゲルダはおばあさまからおそわったように、ていねいにおじぎしました。

「かわいいおじょうさん。わたしのいいなずけは、あなたのことを、たいそうほめておりました。」と、そのやさしいからすがいいました。「あなたの、そのごけいれきとやらもうしますのは、ずいぶんおきのどくなのですね。さあ、ランプをおもちください。ごあんないしますわ。このところをまつすぐにまいりましょう。もうだれにもあいませんから。」  
「だれか、わたしたちのあとから、ついてくるような気がすることね。」と、なにかがそ

ばをきゆうに通つたときに、ゲルダはいました。それは、たてがみをふりみだして、ほつそりとした足をもっている馬だの、それから、かりうどだの、馬にのったりつばな男の人や、女の人だの、それがみんなかべにうつつたかげのように見えました。

「あれは、ほんの夢なのですわ。」と、からすがいいました。「あれらは、それぞれのご主人たちのところを、りょうにさそいだそうとしてくるのです。つごうのいいことに、あなたは、ねどこの中であのひとたちのお休みのところがよくみられます。そこで、どうか、あなたがりつばな身分におなりになったのちも、せわになつたおれいはい、おわすれなくね。」

「それはいうまでもないことだろうよ。」と、森のからすがいいました。

さて、からすとゲルダとは、一ばんはじめの広間にはいつていきました。そのかべには、花でかざつた、ばら色のしゆすが、上から下まで、はりつめられていました。そして、ここにもりようにさそうさつきとのの夢は、もうとんで来ていましたが、あまりはやくうごきすぎて、ゲルダはえらい殿さまとのや貴婦人方きふじんを、こんどはみることができませんでした。ひろまから、ひろまへ行くほど、みどとにできていました。ただもうあまりのうつくしさに、まごつくばかりでしたが、そのうち、とうとうねままではいつていきました。そののてん

じようは、高価なガラスの葉をひろげた、大きなしゆるの木のかたちになっていました。そして、へやのまんなかには、ふたつのベッドが、木のじくにあたる金のふとい柱につりさがつていて、ふたつとも、ゆりの花のようにみえました。そのベッドはひとつは白くて、それには王女がねむっていました。もうひとつのは赤くて、そこにねむっている人こそ、ゲルダのさがすカイちゃんではなくてはならないのです。ゲルダは赤い花びらをひとひら、そつとどけると、そこに日やけしたくびすじが見えました。——ああ、それはカイちゃんでした。

——ゲルダは、カイちゃんの名をこえ高くよびました。ランプをカイちゃんのをうへさしだしました。……夢がまた馬にのつて、さわがしくそのへやの中へ、はいってきました。……その人は目をさまして、顔をこちらにむけました。ところが、それはカイちゃんではなかったのです。

いまは王子となつたその人は、ただ、くびすじのところ、カイちゃんにいたただけでした。でもその王子はわかくて、うつくしい顔をしていました。王女は白いゆりの花ともみえるベッドから、目をぱちくりやつて見あげながら、たれがそこにきたのかと、おたずねになりました。そこでゲルダは泣いて、いままでのことや、からすがいろいろにつく

してくれたことなどを、のこらず王子に話しました。

「それは、まあ、かわいそうに。」と、王子と王女とがいました。そして、からすをおほめになり、じぶんたちはけつして、からすがしたことをおこりはしないが、二どこなことをしてくれるな、とおつしやいました。それでも、からすたちは、ごほうびをいただくことになりました。

「おまえたちは、すきかつてに、そとをとびまわっているほうがいいかい。」と、王女はたずねました。「それとも、宮中おかかえのからすとして、台所のおあまりは、なんでもたべることができると、そういうふうにして、いつまでもごてんにいたいとおもうかい。」

そこで、二わのからすはおじぎをして、自分たちが、としをとってからのことをかんがえると、やはりごてんにおいていたきたいと、ねがいました。そして、

「だれしもいっていますように、さきへいってこまらないように、したいものでございませう。」と、いいました。

王子はそのとき、ベッドから出て、ゲルダをそれにねかせ、じぶんは、それなりねようとはしませんでした。ゲルダはちいさな手をくんで、「まあ、なんといういい人や、いいからすたちだろう。」と、おもいました。それから、目をつぶって、すやすやねむりまし

た。すると、また夢がやってきて、こんどは天使のような人たちが、一だいのそりをひいてきました。その上には、カイちゃんが手まねきしていました。けれども、それはただの夢だったので、目をさますと、さつそくきえてしまいました。

あくる日になると、ゲルダはあたまから、足のさきまで、絹やびろうどの着物でつつまれました。そしてこのままお城にとどまつていて、たのしくらすようとすすめられました。でも、ゲルダはただ、ちいさな馬車と、それをひくうまと、ちいさな一そくの長ぐつがいただきとうございますと、いいました。それでもういちど、ひろい世界へ、カイちゃんをさがしに出ていきたいのです。

さて、ゲルダは長ぐつばかりでなく、マッフまでもらつて、さつぱりと旅のしたくができました。いよいよでかけようというときに、げんかんには、じゆん金のあたらしい馬車が一だいとまりました。王子と王女のもんしょう紋章が、星のようにひかつてついていました。ぎよしやや、べつとうや、おさきばらいが——そうです、おさきばらいまでが——かんむり金の冠をかぶつてならんでいました。王子と王女は、ごじぶんで、ゲルダをたすけて馬車にのらせ、ぶじにいつてくるようにおつしやいました。もういまはけっこんをすませた森のからすも、三マイルさきまで、みおくりについてきました。このからすは、うしろむきにのつ

ていられないというので、ゲルダのそばにすわっていました。めすのほうのからすは、羽根をばたばたやりながら、門のところにとまっています。おくっていないかわけは、あれからずっとごてんづとめで、たくさんにたべものをいただくせいかわ、ひどく頭痛ずうがしていたからです。その馬車のうちがわは、さとうビスケットでできていて、こしをかけるところは、くだものや、くるみのはいったしようがパンでできていました。

「さよなら、さよなら。」と、王子と王女がさげびました。するとゲルダは泣きだしました。——からすもまた泣きました。——さて、馬車が三マイル先のところまできたとき、こんどはからすが、さよならをいいました。この上ないかなしいわかれでした。からすはその木の上にとびあがって、馬車がいよいよ見えなくなるまで、黒いつばさを、ばたばたやっています。馬車はお日さまのようにかがやきながら、どこまでもはしりつづけました。



## 第五のお話

## おいはぎのこむすめ

それから、ゲルダのなかまは、くらい森の中を通っていきました。ところが、馬車の光は、たいまつのようにちらちらしていました。それが、おいはぎどもの目にとまって、がまんがならなくさせました。

「やあ、金だぞ、金だぞ。」と、おいはぎたちはさげんで、いちどにとびだしてきました。馬をおさえて、ぎよしや、べつとうから、おさきばらいまでころして、ゲルダを馬車からひきずりおろしました。

「こりやあ、たいそうふとつて、かわいらしいむすめだわい。きつと、年中くるみの実<sup>み</sup>ばかりたべていたのだろう。」と、おいはぎばばがいました。女のくせに、ながい、こわいひげをはやして、まゆげが、目の上までたれさがったばあさんでした。「なにしろそつくり、あぶらののつた、こひつじというところだが、さあたべたら、どんな味がするかな

。」「  
そういつて、ばあさんは、ぴかぴかするナイフをもちだしました。きれそうにひかって、きみのわるいといったらありません。

「あッ。」

そのとたん、ばあさんはこえをあげました。その女のせなかにぶらさがっていた、こむすめが、なにしろらんぼうなだだつ子で、おもしろがって、いきなり、母親の耳をかんだのです。

「このあまあ、なによをする。」と、母親はさげびました。おかげで、ゲルダをころす、はなさきをおられました。

「あの子は、あたいといっしよにあそぶのだよ。」と、おいはぎのこむすめは、いいました。

「あの子はマッフや、きれいな着物をあたいにくれて、晩にはいっしよにねるのだよ。」  
こういつて、その女の子は、もういちど、母親の耳をしたたかにかみました。それで、ばあさんとはびあがって、ぐるぐるまわりしました。おいはぎどもは、みんなわらって、  
「見ろ、ばばあが、がきといっしよにおどっているからよ。」と、いいました。



「馬車の中へはいってみようや。」と、おいはぎのこむすめはいいました。

このむすめは、わんぱくにそだつて、おまけにごうじょうっぱりでしたから、なんでもしたいとおもうことをしなれば、気がすみませんでした。それで、ゲルダとふたり馬車にのりこんで、きりかぶや、石のでている上を通つて、林のおくへ、ふかくはいつていききました。おいはぎのこむすめは、ちようどゲルダぐらいの大きさでしたが、ずっと、きつそうで、肩つきががっしりしていました。どす黒いくろはだをして、その目はまつ黒で、なんだかなしそうに見えました。女の子は、ゲルダのこしのまわりに手をかけて、

「あたい、おまえとけんかしないうちは、あんなやつらに、おまえをころさせやしないことよ。おまえはどこかの王女じゃなくて。」と、いいました。

「いいえ、わたしは王女ではありません。」と、ゲルダはこたえて、いままでにあつたできごとや、じぶんがどんなに、すきなカイちゃんのことを思っているか、ということなどを話しました。

おいはぎのむすめは、しげしげとゲルダを見て、かるくうなずきながら、

「あたいは、おまえとけんかしたつて、あのやつらに、おまえをころさせやしないよ。そんなくらいなら、あたい、じぶんでおまえをころしてしまうわ。」と、いいました。

それからむすめは、ゲルダの目をふいてやり、両手をうつくしいマッフにつけてみましたが、それはたいへん、ふつくりして、やわらかでした。

さあ、馬車はとまりました。そこはおいはぎのこもる、お城のひろ庭でした。その山<sup>さんざ</sup>塞<sup>い</sup>は、上から下までひびだらけでした。そのずれたわれ目から、大がらす小がらすがとびまわっていました。大きなブルドッグが、あいてかまわず、にんげんでもくってしまいうようなようで、高くとびあがりました。でも、けっしてほえませんでした。ほえることはとめられてあつたからです。

大きな、煤<sup>すす</sup>けたひろまには、煙がもうもうしていて、たき火が、赤あかと石だたみのゆか上でもえています。煙はてんじょうの下にたちまよって、どこからともなくでていきました。大きなおなべには、スープがにえたって、大うさぎ小うさぎが、あぶりぐしにさして、やかれています。

「おまえは、こん夜は、あたいや、あたいのちいさなどうぶつといっしょにねるのよ。」と、おいはぎのこむすめがいました。

ふたりはたべものと、のみものをもらうと、わらや、しきものがしいてある、へやのすみのほうへ行きました。その上には、百ばよりも、もっとたくさんのはとが、ねむったよ

うに、木摺きずりや、とまり木にとまっていたましたが、ふたりの女の子がきたときには、ちよつとこちらをむきました。

「みんな、このはと、あたいのものなのよ。」と、おいはぎのこむすめはいつて、てばやく、てぢかにいた一わをつかまえて、足をゆすぶつたので、はとは、羽根をばたばたやりました。

「せつぶんしておやりよ。」と、いつて、おいはぎのこむすめは、それを、ゲルダの顔になげつけました。

「あすこにとまっているのが、森のあばれものさ。」と、そのむすめは、かべにあげたあなに、うちこまれたとまり木を、ゆびさしながら、また話しつづけました。「あれは二わとも森のあばれものさ。しつかり、とじこめておかないと、すぐにげていつてしまうの。ここににいるのが、昔からおともだちのベーよ。」

こういつて、女の子は、ぴかぴかみかみがいた、銅どうのくびわをはめたままつながれている、一ぴきのとなかいを、つのもつてひきだしました。

「これも、しつかりつないでおかないと、にげていつてしまうの。だから、あたいはね、まい晩よくきれるナイフで、くびのところをくすぐつてやるんだよ。すると、それはびつ

くりするつたらありやしない。」

そういいながら、女の子はかべのわれめのところから、ながいナイフをとりだして、それをとなくいのくびにあてて、そろそろなでました。かわいそうに、そのけものは、足をどンドンやって、苦しがりました。むすめは、おもしろそうにわらって、それなりゲルダをつれて、ねどこに行きました。

「あなたはねているあいだ、ナイフをはなさないの。」と、ゲルダは、きみわるそうに、それを見ました。

「わたい、しょっちゅうナイフをもっているよ。」と、おいはぎのこむすめはこたえました。

「なにがはじまるかわからないからね。それよか、もういちどカイちゃんって子の話をしてくれない、それから、どうしてこのひろい世界に、あてもなくでてきたのか、そのわけを話してくれないか。」

そこで、ゲルダははじめから、それをくりかえしました。森のはとが、頭の上のかごの中にくうくういっていました。ほかのはとはねむっていました。おいはぎのこむすめは、かた手をゲルダのくびにかけて、かた手にはナイフをもったまま、大いびきをかいてねて

しまいました。けれども、ゲルダは、目をつぶることもできませんでした。ゲルダは、いったい、じぶんは生かしておかれるのか、ころされるのか、まるでわかりませんでした。

たき火のぐるりをかこんで、おいはぎたちは、お酒をのんだり、歌をうたったりしていました。そのなかで、ばあさんがとんぼをきりました。ちいさな女の子にとっては、そのありさまを見るだけで、こわいことでした。

そのとき、森のはとが、こういいました。

「くう、くう、わたしたち、カイちゃんを見ましたよ。一わの白いめんどりが、カイちゃんのをはこんでいました。カイちゃんは雪の女王のそりにのって、わたしたちが、巢にねていると、森のすぐ上を通っていったのですよ。雪の女王は、わたしたち子ばとに、つめたいいきをふきかけて、ころしてしまいました。たすかったのは、わたしたち二わだけ、くう、くう。」

「まあ、なにをそこでいつてるの。」と、ゲルダが、つい大きなこえをしました。「その雪の女王さまは、どこへいったのでしょうか。そのさきのこと、なにかしつていて。おしえてよ。」

「たぶん、\*ラップランドのほうへいったのでしょうか。そこには、年中、氷や雪があり



ますからね。まあ、つながれている、となかいに、きいてごらんさい。」

\*ヨーロッパの極北、スカンジナビア半島の北東部、四〇万平方キロ一帯の寒い土地。遊牧民のラップ人がすむ。

すると、となかいがひきとって、

「そこには年中、氷や雪があつて、それはすばらしいみごとなものですよ。」といいました。

「そこでは大きな、きらきら光る谷まを、自由にはしりまわることができすし、雪の女王は、そこに夏のテントをもっています。でも女王のりっぱな本城ほんじょうは、もっと北極のほうの、\*スピッツベルゲンという島の上にあるのです。」

\*ノルウエーのはるか北、北極海にちかい小島群（一名スヴァバルド）。

「ああ、カイちゃんは、すきなカイちゃんは。」と、ゲルダはためいきをつきました。

「しずかにしなよ。しないと、ナイフをからだにつきさすよ。」と、おいはぎのこむすめがいました。

あさになって、ゲルダは、森のほとが話したことを、すっかりおいはぎのこむすめに話しました。するとむすめは、たいそうまじめになって、うなずきながら、

「まあいいや。どっちにしてもおなじことだ。」と、いいました。そして、  
「おまえ、ラップランドって、どこにあるのかしってるのかい。」と、むすめは、となかにたずねました。

「わたしほど、それをよく知っているものがございませうか。」と、目をかがやかしながら、となかいがこたえました。「わたしはそこで生まれて、そだったのです。わたしはそこで、雪の野原を、はしりまわっていました。」

「ごらん。みんなでかけていってしまうだろう。おつかさんだけがうちにいる。おつかさんは、ずっとうちののこっているのよ。でもおひるちかくなると、大きなびんからお酒をのんで、すこしのあいだ、ひるねするから、そのとき、おまえにいいことをしてあげよう。」と、おいはぎのこむすめはゲルダにいいました。

それから女の子は、ぱんと、ねどこからはねおきて、おつかさんのくびのまわりにかじりついて、おつかさんのひげをひっぱりながら、こういいました。

「かわいい、めやぎさん、おはようございます。」

すると、おつかさんは、女の子のはなが赤くなったり紫むらさきいろ色になったりするまで、ゆびではじきました。

でもこれは、かわいくてたまらない心からすることでした。

おつかさんが、びんのお酒をのんで、ねてしまったとき、おいはぎのこむすめは、とかいのところへいつて、こういいました。

「わたしはもつと、なんべんも、なんべんも、ナイフでおまえを、くすぐってやりたいのだよ。だって、ずいぶんおかしいんだもの、でも、もういいさ。あたい、おまえがラツプランドへ行けるように、つなをほだいてにがしてやろう。けれど、おまえはせつせとはして、この子を、この子のおともだちのいる、雪の女王のごてんへ、つれていかなければいけないよ。おまえ、この子があたいに話していたこと、きいていたろう。とても大きなこえで話したし、おまえも耳をすまして、きいていたのだから。」

となかいはよろこんで、高くはねあがりました。その背中においてはぎのこむすめは、ゲルダをのせてやりました。そして用ようじん心ぶかく、ゲルダをしっかりといわえつけて、その上、くらのかわりに、ちいさなふとんまで、しいてやりました。

「まあ、どうでもいいや。」と、こむすめはいいました。「そら、おまえの毛皮のながぐつだよ。だんだんさむくなるからね。マツフはきれいだからもらっておくわ。けれど、おまえにさむいおもいはさせないわ。ほら、おつかさんの大きなまる手ぶくろがある。おま

えなら、ひじのところまで、ちようどとどくだろう。まあ、これをはめると、おまえの手が、まるであたいのいやなおつかさんの手のようだよ。」と、むすめはいいました。

ゲルダは、もううれしくて、なみだ涙がこぼれました。

「泣くなんて、いやなことだね。」と、おいはぎのこむすめはいいました。「ほんとは、うれしいはずじゃないの。さあ、ここにふたつ、パンのかたまりと、ハムがあるわ。これだけあれば、ひもじいおもいはしないだろう。」

これらの品じなは、となかいの背中のうしろにいわえつけられました。おいはぎのむすめは戸をあけて、大きな犬をだまして、中にいれておいて、それから、よくきれるナイフでつなをきると、となかいにむかつていいました。

「さあ、はしつて。そのかわり、その子に、よく気をつけてやってよ。」

そのとき、ゲルダは、大きなまる手ぶくろをはめた両手を、おいはぎのこむすめのほうにさしのぼして、「さようなら。」といいました。

とたんに、となかいはかけだしました。木の根、岩かどをとびこえ、大きな森をつきぬけて、沼地や草原もかまわず、いっしょうけんめい、まっしぐらにはしつていきました。おおかみがほえ、わたりがらすがこえをたてました。ひゅツ、ひゅツ、空で、なにか音が

しました。それはまるで花火があがったように。

「あれがわたしのなつかしい北極光オーロラです。」と、となかいいいました。「ごらんなき  
い。なんてよく、かがやいているでしょう。」

それからとなかいは、ひるも夜も、前よりももつとはやくはしって行きました。

パンのかたまりもなくなりました。ハムもたべつくしました。となかいとゲルダとは、  
ラツブランドにつきました。

## 第六のお話

## ラップランドの女とフィンランドの女

ちいさな、そまつなこやの前で、となかいはとまりました。そのこやはたいそうみすばらしくて、屋根は地面やね じめんとすれすれのところまでも、おおいかぶさっていました。そして、戸口がたいそうひくくついているものですから、うちの人が出たり、はいったりするときには、はらばいになって、そこをくぐらなければなりませんでした。その家には、たったひとり年とつたラップランドの女がいて、鯨油げいゆランプのそばで、おさかなをやいていました。となかいはそのおばあさんに、ゲルダのことをすっかり話してきかせました。でも、その前にじぶんのことをまず話しました。となかいは、じぶんの話のほうが、ゲルダの話よりたいせつだとおもったからでした。

ゲルダはさむさに、ひどくやられていて、口をきくことができませんでした。

「やれやれ、それはかわいそうに。」と、ラップランドの女はいいました。「おまえたち



はまだまだ、ずいぶんとおくはしって行かなければならないよ。百マイル以上も北の\*フィンマルケンのおくふかくはいらなければならぬのだよ。雪の女王はそこにいて、まい晩、青い光を出す花火をもやしているのさ。わたしは紙をもっていないから、干鱈ひだらのうえに、てがみをかいてあげよう。これをフィンランドの女のところへもっておいで。その女のほうが、わたしよりもくわしく、なんでも教えてくれるだろうからね。」

\*ノルウエーの北端、最低地方。

さてゲルダのからだもあたたまり、たべものやのみものでげんきをつけてもらったとき、ラップランドの女は、干鱈ひだらに、ふたことみこと、もんくをかきつけて、それをたいせつにもっていくように、と行ってだしました。ゲルダは、またとなくいにいわえつけられてでかけました。ひゅつひゅつ、空の上でまたいきました。ひと晩中、この上もなくうつくしい青色をした、極オーロラ光がもえていました。——さて、こうして、となくいとゲルダとは、フィンマルケンにつきました。そして、フィンランドの女の家のおえんとつを、こつこつたたきました。だつてその家には、戸口もついていませんでした。

家の中は、たいへんあついで、その女の人は、まるではだか同様でした。せいひくいむさくるしいようすの女でした。女はすぐに、ゲルダの着物や、手ぶくろや、ながぐつ



をぬがせました。そうしなければ、とてもあつくて、そこにはいられなかったからです。それから、となかいのあたまの上に、ひとかけ、氷のかたまりを、のせてやりました。そして、ひだらにかきつけてあるもんくを、三べんもくりかえしてよみました。そしてすっかりおぼえこんでしまうと、スープをこしらえる大なべの中へ、たらをなげこみました。そのたらはたべることができたからで、この女の人は、けっしてどんなものでも、むだにはしませんでした。

さて、となかいは、まずじぶんのことを話して、それからゲルダのことを話しました。するとフィンランドの女は、そのりこうそうな目をしばたいたただけで、なにもいいませんでした。

「あなたは、たいそう、かしこくていらっしやいますね。」と、となかいは、いいました。「わたしはあなたが、いっぽんのより糸で、世界中の風をつなぐことがおできになると、きいております。もしも舟のりが、そのいちばんはじめのむすびめをほくなら、つごうのいい追風がふきます。二ばんめのむすびめだったら、つよい風がふきます。三ばんめと四ばんめをほくなら、森ごとふきたおすほどのあらしがふきすさみます。どうか、このむすめさんに、十二人りきがついて、しゅびよく雪の女王にかてますよう、のみものをひ

とつ、つくつてやっていただけませんか。」

「十二人りきかい。さぞ役にたつだろうよ。」と、フィンランドの女はくりかえしていいました。

それから女の人は、たなのところへいつて、大きな毛皮のまいたものをもつてきてひろげました。それには、ふしぎなもんじがかいてありましたが、フィンランドの女は、ひたいから、あせがたれるまで、それをよみかえました。

でも、となかいは、かわいいゲルダのために、またいっしょうけんめい、その女の人にしたのみました。ゲルダも目に涙をいっばいためて、おがむように、フィンランドの女を見あげました。女はまた目をしばたたきはじめました。そして、となかいをすみのほうへつれていつて、そのあたまにあたらしい氷をのせてやりながら、こうつぶやきました。

「カイつて子は、ほんとうに雪の女王のお城にいるのだよ。そして、そこにあるものはないでも氣にいつてしまつて、世界にこんないいところはないとおもっているんだよ。けれどそれというのも、あれの目のなかには、鏡のかけらがはいつているし、しんぞうのなかにだつて、ちいさなかけらがはいつているからなのだよ。だからそんなものを、カイからとりだしてしまわないうちは、あれはけつしてまにんげんになることはできないし、いつ

までも雪の女王のいうなりになっていることだろうよ。」

「では、どんなものにも、うちかつことのできる力になるようなものを、ゲルダちゃんにくださるわけにはいかないでしょうか。」

「このむすめに、うまれついてもっている力よりも、大きな力をさずけることは、わたしにはできないことなのだよ。まあ、それはおまえさんにも、あのむすめがいまもっている力が、どんなに大きな力だかわかるだろう。ごらん、どんなにして、いろいろと人間やどうぶつが、あのむすめひとりのためにしてやっているか、どんなにして、はだしのくせに、あのむすめがよくもこんなとおくまでやってこられたか。それだもの、あのむすめは、わたしたちから、力をえようとしてもだめなのだよ。それはあのむすめの心のなかにあるのだよ。それがかわいいむじやきなこどもだということとあるのだよ。もし、あのむすめが、自分で雪の女王のところへ、でかけていって、カイからガラスのかけらをとりだすことができないようなら、まして、わたしたちの力におよばないとき。もうここからニマイルばかりで、雪の女王のお庭の入口になるから、おまえはそこまで、あの女の子をはこんでいって、雪の中で、赤い実<sup>み</sup>をつけてしげっている、大きな木やぶのところに、おろしてくるがいい。それで、もうよけいな口をきかないで、さつきとかえっておいで。」

こういつて、フィンランドの女は、ゲルダを、となかいのせなかにのせました。そこでとなかいは、ぜんそくりよくで、はしりだしました。

「ああ、あたしは、長ぐつをおいてきたわ。手ぶくろもおいてきてしまった。」と、ゲルダはさげびました。

とたんに、ゲルダは身をきるようなさむさをかんじました。でも、となかいはけつしてとまろうとはしませんでした。それは赤い実みのなつた木やぶのところへくるまで、いっさんばしりに、はしりつづけました。そして、そこでゲルダをおろして、くちのところにせつぶんしました。

大つぶの涙が、となかいの頬ほおを流れました。それから、となかいはまた、いっさんばしりに、はしっていつてしまいました。かわいそうに、ゲルダは、くつもはかず、手ぶくろもはめずに、氷にとじられた、さびしいフィンマルケンのまっただなかに、ひとりりりのこされて立っていました。

ゲルダは、いっしょうけんめいかげだしました。すると、雪の大軍が、むこうからおしよせてきました。

けれど、その雪は、空からふつてくるのではありません。空は極光オーロラにてらされて、き

らきらかがやいていました。雪は地面の上をまっすぐに走ってきて、ちかくにくればくるほど、形が大きくなりました。ゲルダは、いつか虫めがねでのぞいたとき、雪のひとひらがどんなにか大きくみえたことを、まだおぼえていました。けれども、この雪はほんとうに、ずっと大きく、ずっとおそろしくみえました。この雪は生きていました。それは雪の女王の前ぜんしやう哨しょうでした。そして、ずいぶんへんてこな形をしていました。大きくてみにくい、やまあらしのようなものもあれば、かまくびをもたげて、とぐろをまいてるへびのようなかつこうのもあり、毛のさかさにはえた、ふとった小ぐまにたものもありました。それはみんなまぶしいように、きらきら白くひかりました。これこそ生きた雪の大軍でした。

そこでゲルダは、いつもの主しゆの祈いのちの「われらの父」をとなえしました。さむさはとてもひどくて、ゲルダはじぶんのつくいきを見るできませんでした。それは、口からけむりのようにたちのぼりました。そのいきはだんだんこくなって、やがてちいさい、きゃしやな天使になりました。それが地びたにつくといつしよに、どんどん大きくなりました。天使たちはみな、かしらにはかぶとをいただき、手には楯たてとやりをもっていました。天使はだんだんふえるばかりでした。そして、ゲルダが主しゆのおいのりをおわったときには、りっ

ばな天使軍の一たいが、ゲルダのぐるりをとりまいていました。天使たちはやりをふるって、おそろしい雪のへいたいをうちたおすと、みんなちりぢりになってしまいました。そこでゲルダは、ゆうきをだして、げんきよく進んで行くことができました。天使たちは、ゲルダの手と足をさすりました。するとゲルダは、前ほどさむさを感じなくなつて、雪の女王のお城をめがけていそぎました。

ところで、カイは、あののち、どうしていたでしょう。それからまずお話をすすめましょう。カイは、まるでゲルダのことなど、おもつてはいませんでした。だから、ゲルダが、雪の女王のごてんまできているなんて、どうして、ゆめにもおもわれないことでした。

## 第七のお話

## 雪の女王のお城でのできごととそのちのお話

雪の女王のお城は、はげしくふきたまる雪が、そのままかべになり、窓や戸口は、身を通りかかれない風で、できていました。そこには、百いじょうの広間が、じゆんにならんでいました。それはみんな雪のふきたまったものでした。いちばん大きな広間はなんマイルにもわたっていました。つよい極光オーロラがこの広間をもてらして、それはただもう、ばか大きく、がらんとしていて、いかにも氷のようにつめたく、きらきらして見えました。たのしみというものの、まるでないところでした。あらしが音楽をかなでて、ほっきよくぐまがあと足で立ちあがって、氣どつておどるダンスの会もみられません。わかい白ぎつねの貴婦人きふじんのあいだに、ささやかなお茶ちやの会かいがひらかれることもありませぬ。雪の女王の広間は、ただもうがらんとして、だだっぴろく、そしてさむいばかりでした。極光のもえるのは、まことにきそく正しいので、いつがいちばん高いか、いつがいちばんひくいかな、は

つきり見ることができました。このはてしなく大きながらんとした雪の広間のまん中に、なん千万という数のかけらにわれてこおった、みずうみがありました。われたかけらは、ひとつひとつおなじ形をして、これがあつまって、りっぱな美術品になっていました。このみずうみのまん中に、お城にいるとき、雪の女王はすわっていました。そしてじぶんは理<sup>りせい</sup>性の鏡のなかにすわっているのだ、この鏡ほどのものは、世界中さがしてもない、といっていました。

カイはここにいて、さむさのため、まつ青に、というよりは、うす黒くなっていました。それでいて、カイはさむさを感じませんでした。というよりは、雪の女王がせつぷんして、カイのからだだから、さむさをすいとってしまったからです。そしてカイのしんぞうは、氷のようになっています。カイは、たいらな、いく枚かのうすい氷の板を、あっちこっちからはこんできて、いろいろにそれをくみあわせて、なにかつくろうとしていました。まるでわたしたちが、むずかしい漢字をくみ合わせるようでした。カイも、この上なく手のかんだ、みごとな形をつくりあげました。それは氷のちえあそびでした。カイの目には、これらのものの形はこのうえなくりっぱな、この世の中で一ばんたいせつなもののようにみえました。それはカイの目にささった鏡のかけらのせいでした。カイは、形でひとつの





ことばをかきあらわそうとおもって、のこらずの氷の板をならべてみましたが、自分からわらわしたいとおもうことば、すなわち、「永遠えいえん」ということばを、どうしてもつくりだすことはできませんでした。でも、女王はいつていました。

「もしおまえに、その形をつくることがわかれば、からだも自由になるよ。そうしたら、わたしは世界ぜんたいと、あたらしいそりぐつを、いつそくあげよう。」

けれども、カイには、それができませんでした。

「これから、わたしは、あたたかい国を、ぎつとひとまわりしてこよう。」と、雪の女王はいいました。「ついでにその黒なべをのぞいてくる。」黒なべというのは、\*エトナとかヴェスヴィオとか、いろんな名の、火をはく山のことでした。「わたしはすこしばかり、それを白くしてやろう。ぶどうやレモンをおいしくするためがいいそうだから。」

\*エトナはイタリア半島の南シシリー島の火山。ヴェスヴィオはおなじくナポリ市の東方にある火山。

こういつて、雪の女王は、とんでいってしまいました。そしてカイは、たったひとりぼっちで、なんマイルというひろさのある、氷の大広間のなかで、氷の板を見つめて、じつと考えこんでいました。もう、こちこちになって、おなかのなかの氷が、みしりみしりい

うかとおもうほど、じつとうごかずにはいました。それをみたら、たれも、カイはこおりついたり、死んでしまったのだとおもったかもしれませぬ。

ちやうどそのとき、ゲルダは大きな門を通つて、その大広間にはいつてきました。そこには、身をきるような風が、ふきすさんでいましたが、ゲルダが、ゆうべのおいのりをあげると、ねむつたように、しずかになつてしまいました。そして、ゲルダは、いくつもの、いくつも、さむい、がらんとしたひろまをぬけて、——とうとう、カイをみつけました。ゲルダは、カイをおぼえていました。で、いきなりカイのくびすじにとびついて、しつかりだきしめながら、

「カイ、すきなカイ。ああ、あたしとうとう、みつけたわ。」と、さげびました。

けれども、カイは身ゆるぎもせず、じつとしゃちほこばつたなり、つめたくなつていました。そこで、ゲルダは、あつい涙を流して泣きました。それはカイのむねの上におちて、しんぞうのなかにまで、しみこんで行きました。そこにたまつた氷をとかして、しんぞうの中の、鏡のかけらをなくなしてしまいました。カイは、ゲルダをみました。ゲルダはうたいました。

ばらのはな さきてはちりぬ

おさな子エス やがてあおがん

すると、カイはわつと泣きだしました。カイが、あまりひどく泣いたものですから、ガラスのとげが、目からぼろりとぬけてでてしまいました。すぐとカイは、ゲルダがわかりました。そして、大よろこびで、こえをあげました。

「やあ、ゲルダちゃん、すきなゲルダちゃん。——いままでどこへいったの、そしてまた、ぼくはどこにいたんだろう。」こういって、カイは、そこらを見まわしました。「こは、ずいぶんさむいんだなあ。なんて大きくて、がらんとしているんだろうなあ。」

こういって、カイは、ゲルダに、ひとりとつきましました。ゲルダは、うれしまぎれに、泣いたり、わらったりしました。それがあまりたのしそうなので、氷の板きれまでが、はしゃいでおどりだしました。そして、おどりつかれてたおれてしまいました。そのたおれた形が、ひとりでに、ことばをつづっていました。それは、もしカイに、そのことばがつづれたら、カイは自由になれるし、そしてあたらしいそりぐつと、のこらずの世界をやろうと、雪の女王がいった、そのことばでした。

ゲルダは、カイのほおにせつぶんしました。みるみるそれはほおつと赤くなりました。それからカイの目にもせつぶんしました。すると、それはゲルダの目のようになり、かがやきだしました。カイの手だの足だのにもせつぶんしました。これで、しつかりしてげんきになりました。もうこうなれば、雪の女王がかえつてきても、かまいません。だって、女王が、それができればゆるしてやるといったことばが、ぴかぴかひかる氷のもんじで、はっきりとそこにかかれていたからです。

さて、そこでふたりは手をとりあつて、その大きなお城からそとへでました。そして、うちのおばあさんの話だの、屋根の上のばらのことなどを、語りあいました。ふたりが行くさきざきには、風もふかず、お日さまの光がかがやきだしました。そして、赤い実みのなつた、あの木やぶのあるところに来たとき、そこにもう、となかいがいて、ふたりをまつていました。そのとなかいは、もう一ぴきのわかいとなかいはつれていました。そして、このわかいほうは、ふくれた乳ぶさからふたりのこどもたちに、あたたかいおちちを出してのませてくれて、そのくちの上にせつぶんしました。それから二ひきのとなかいは、カイとゲルダをのせて、まずフィンランドの女のところへ行きました。そこでふたりは、あのあついへやで、じゅうぶんからだをあたためて、うちへかえる道をおしえてもらいまし

た。それからこんどは、ラップランドの女のところへいききました。その女は、ふたりにあたらしい着物をつくってくれたり、そりをそろえてくれたりしました。

となかいと、もう一ぴきのとなかいとは、それなり、ふたりのそりについてはしつて、

国境くにぎわいまでおくつてきてくれました。そこでは、はじめて草の緑がもえだしていました。

カイとゲルダとは、ここで、二ひきのとなかいと、ラップランドの女とにわかれしました。

「さようなら。」と、みんなはいいました。そして、はじめて、小鳥がさえずりだしました。森には、緑の草の芽が、いっぱいにふいていました。

その森の中から、うつくしい馬にのった、わかいむすめが、赤いぴかぴかするぼうしをかぶり、くらにピストルを二ちようさして、こちらにやってきました。ゲルダはその馬をしつていました。（それは、ゲルダの金の馬車きんをひっぱった馬であつたからです。）そして、このむすめは、れいのおいはぎのこむすめでした。この女の子は、もう、うちにいるのがいやになって、北の国のほうへいつてみたいとおもっていました。そしてもし、北の国が気にいらなかつたら、どこかほかの国へいつてみたいとおもっていました。このむすめは、すぐにゲルダに気がつきました。ゲルダもまた、このむすめをみつけました。そして、もういちどあえたことを、心からよろこびました。

「おまえさん、ぶらつきやのほうでは、たいしたおやぶんさんだよ。」と、そのむすめは、カイにいいました。「おまえさんのために、世界のはてまでもさがしにいったりやるだけのねうちが、いったい、あつたのかしら。」

けれども、ゲルダは、そのむすめのほおを、かるくさすりながら、王子と王女とは、あのちどうなつたかとききました。

「あの人たちは、外国へいつてしまったのさ。」と、おいはぎのこむすめがこたえました。「それで、からすはどうして。」と、ゲルダはずねました。

「ああ、からすは死んでしまったよ。」と、むすめがいました。「それでさ、おかみさんがらすも、やもめになつて、黒い毛糸の喪章もしょうを足につけてね、ないてばかりいるつていうけれど、うわさだけだろう。さあ、こんどは、あれからどんな旅をしたか、どうしてカイちゃんをつかまえたか、話しておくれ。」

そこで、カイとゲルダとは、かわりあつて、のこらずの話をしました。

「そこで、よろしく、ちんがらもんがらか、でも、まあうまくいって、よかつたわ。」と、むすめはいいました。

そして、ふたりの手をとつて、もしふたりのすんでいる町を通ることがあつたら、きつ

とたずねようと、やくそくしました。それから、むすめは馬をとばして、ひろい世界へで  
て行きました。でも、カイとゲルダとは、手をとりあって、あるいていきました。いくほ  
ど、そこらが春めいてきて、花がさいて、青葉がしげりました。お寺の鐘かねがきこえて、お  
なじみの高い塔とうと、大きな町が見えてきました。それこそ、ふたりがすんでいた町でした。  
そこでふたりは、おばあさまの家の戸口へいって、かいだんをあがって、へやへはいりま  
した。そこではなにもかも、せんとかわっていませんでした。柱どけいが「カツチンカツ  
チン」いって、針がまわっていました。けれど、その戸口をはいるとき、じぶんたちが、  
いつかもうおとなになっていくことに気がつきました。おもての屋根やねのといの上では、ば  
らの花がさいて、ひらいた窓から、うちのなかをのぞきこんでいました。そしてそこには、  
こどものいすがおいてありました。カイとゲルダとは、めいめいのいすにこしをかけて、  
手をにぎりあいました。ふたりはもう、あの雪の女王のお城のさむい、がらんとした、そ  
うごんなけしきを、ただぼんやりと、おもくるしい夢のようにおもっていました。おばあ  
さまは、神さまの、うららかなお日さまの光をあびながら、「なんじら、もし、おさなご  
のごとくならずば、天国にいることをえじ。」と、高らかに聖書せいしょの一せつをよんでいま  
した。





カイとゲルダとは、おたがいに、目と目を見あわせました。そして、

ばらのはな さきてはちりぬ

おさな子エスやがてあおがん

というさんび歌のいみが、にわかにはつきりとわかってきました。

こうしてふたりは、からだこそ大きくなっても、やはりこどもで、心だけはこどものままで、そこにこしをかけていました。

ちようど夏でした。あたたかい、みめぐみあふれる夏でした。

# 青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集 第二巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月15日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本中、\*で示された語句の訳註は、当該語句のあるページの下部に挿入されていますが、このファイルでは当該語句のある段落のあとに、5字下げで挿入しました。

※見出しの字下げは底本通りとしました。

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005年11月22日作成

2014年3月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雪の女王

## SNEDRONNINGEN

2020年 7月17日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 七つのお話でできているおとぎ物語

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>